

30327 ✓

教科書文庫

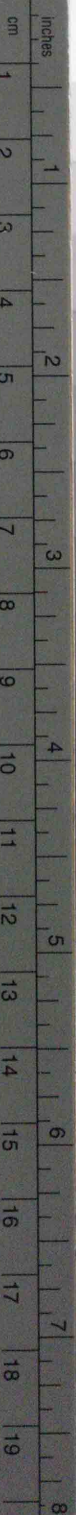
3
815
41-1901
2000302336

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



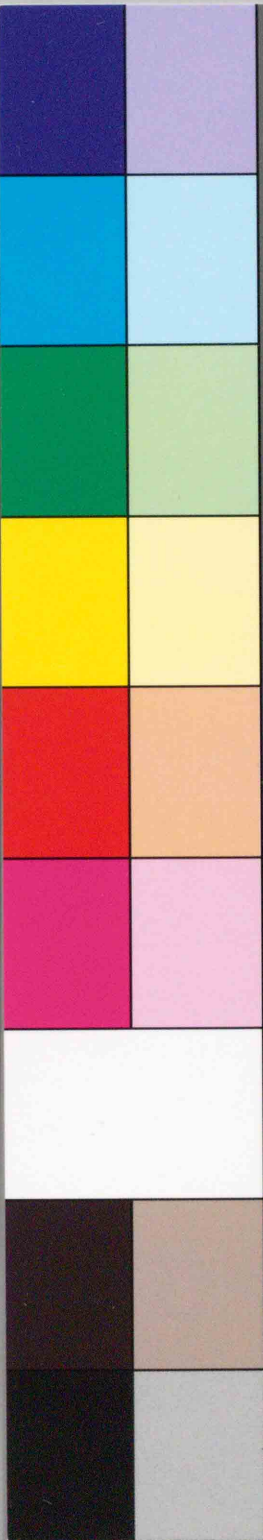
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Mi20
資料室

普通文法教科書

上卷



清水平一郎
三矢重松 合著

上卷

普通文法教科書

東京 明治書院

例言

一 本書は中等教育に於て日本文法を授くる教科書として編述したるものなり。題して普通文法といふは專、今世に用ふる普通の文章を標準としたればなり。

一 本書は平易簡明を主として普通の文法を説きたれば古文古語或は特殊の例に及ばざるもあり。此等はすべて其の場合に當りて教授者の説明するに譲れり。

一 本書の用語は勉めて世の慣用に從ひたれども、引略音轉音の如き、或は動詞形容詞の前提法の如き、いた十分世に廣まらざる者も無きにあらず。これ著者等が多年の研究實行によりて極めて適切の語なるを信じられたればなり。



一 本書は内容によりて巻を別ち、強ひて學年に配當する
ることをせず。これ諸學校の時間の配當全く一樣な
らざるを以て、適宜の使用に任せたるなり。

明治三十四年二月

清 水 平 一 郎
三 矢 重 松

普通文法教科書上巻目次

聲音篇

第一章 聲音及文字	一
一 清音	一
二 濁音半濁音	四
三 母音父音子音鼻音	五
四 拗音	七
五 引音	八
六 畧音	九
七 轉音	一〇
第二章 假名遣	一一

一	ハ	ワ	二二		
二	ヒ	井	イ	一三	
三	フ	ウ	ユ	一四	
四	ヘ	エ	エ	一六	
五	ホ	ナ	オ	一八	
六	フ	ウ	ホ	オ	一九
七	ア	列	オ	列	二二
第三章 漢字						
一	畫及部首			二三	
二	字體			二五	
三	音訓			二六	
第四章 字音假名遣						
.....	三一	

言語篇

一	轉音或は略音上の誤	三二		
二	引音上の誤	三三		
言語篇					
第一章	名詞	四二		
	普通名詞	特別名詞	例題		
第二章	代名詞	四四		
	人代名詞	指示代名詞	稱	例題	
第三章	形容詞	五〇		
	語根	語尾	活用	例題	
第四章	動詞	五四		
	語根	語尾	六類	活用	例題



自他 例題

第五章	副詞	……………	七四
第六章	接續詞	……………	七七
第七章	感動詞	……………	七八
第八章	助辭	……………	八〇
	活く助辭	……………	
	活かぬ助辭	……………	

目次終

普通文法教科書 上卷

聲音篇

第一章 聲音及文字

○人の聲音によりて思想を表すものを言語といひ、言語を書き表すものを文字といふ。
 我が國語を書き表す文字に、假名と漢字との二種あり。
 假名は單に言語の聲音を表し、漢字は一の意味ある言語を表す。
 ○假名に兩體あり、一片假名、二平假名。

一、清音

片假名

ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ行	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ行	ワ	ヰ	ヱ	ヮ	ヹ

ア列 イ列 ウ列 エ列 オ列

平假名

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	い	ゆ	ゆ	よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	ゐ	う	ゑ	を

あ列 い列 う列 え列 ら列

縦を行ごいひ横を列ごいふ。行はア列を以て名ごし列はア行を以て名ごす。

右を清音五十音圖ごいふ。

五十音の中にて、文字の區別を立てざるものあり。えぬはアヤ兩行に通じ、れい子字はイいウうエにて兼ね。

片假名にて イレ ヲ子 エ

平名假にて いゆ う字 えぬ

五十音を表す文字に異體のものあり。

片假名

子ネ 井非

平假名

あわ おね

あ、りか

れき

くく

ふけ	ふこ	せさ	あし	す
させ	さた	ちち	りつ	てて
とと	あな	ふよに	ねね	乃此の
そのは	ほほ	まま	あまみ	あめ
もも	ゆゆ	とよ	くら	きれ
茂を				

平假名には尙多けれど、略す。

此の外に二音を合したる假名あり。

平假名	エ(こと)	カ(より)	ニ(なり)
片假名	コト	キ(トキ)	ニ(トモ)
			シテ

二、濁音・半濁音

片假名

平假名

カ行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
サ行	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ行	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	バ	ビ	ブ	ベ	ボ
ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	ア列

右を濁音といふ。

右を半濁音又は次清音といふ。

三、母音・父音・子音・鼻音

○清音五十音及濁音・半濁音とも、ア列に在る音は之を長く發音すれば、皆ア、といふ餘韻あり。即、かア、さア、たア、なア、等の如し。又、イ列の音は、イ

といふ餘韻あり。ウ列の音には、ウといふ餘韻あり。エ列の音には、エといふ餘韻あり。オ列の音には、オといふ餘韻あり。かく各列にある餘韻を母音といふ。即ちア、イ、ウ、エ、オなり。

父音は、く、より、ウを引き去りたるが如き韻なり。假令は、ガ、カ、ウのクの如きものなり。父音はア行を除き、清音濁音・半濁音とも一行より一づゝあり。故に其の数は十四あれども之を表すべき文字なし。母音と父音とより成りたるものを子音といふ。又複音ともいふ。カ行より以下十四行の音、即ち七十音は皆子音なり。

ウン、ヌン、などのンは他音の下に添ひてのみ

○發音せらるゝ音にして、之を鼻音、又は撥音といふ。平假名、んなり。

四、拗音

○キヨと二字かけども、之を二音にキヨ(清)と發音せずして、一音よキヨ(居)と發音するにあり。之を拗音といふ。

イ列音よりヤ行音を配合したるをヤ行拗音といふ。

きや	きゆ	きよ
しや	しゆ	しよ
ちや	ちゆ	ちよ
にや	にゆ	によ
ひや	ひゆ	ひよ

みや みや みよ
 りや りや りよ
 ぎや ぎや ぎよ
 じや じや じよ
 ぢや ぢや ぢよ
 びや びや びよ
 びや びや びよ

ウ列音にロ行音を配合したるをロ行拗音といふ。

五、引音

○コウシ と三字綴れども、之を三音よ コウシ(小牛)

と發音せずして上の コウ を一音に コウシ(孔子)と發音するとあり。この コウ の如きを引音といふ。

きのふ ほふし まうし
 おほざあ ちふー すてー ちよん

引音は多く、フ、ウの添はりたる場合あり。ホの添はりたる場合は稍少し。ーは外國語の引音を表す場合のみ用ふ。

六、畧音

○タヒ コヒ あどを タイ コイ と發音するは
 ヒ の母音のみ發音するなり。之を畧音といふ。
 また ユカム ナムヂ あどを ユカン ナンヂ

と發音し、ガクカ、ウ セツケン かどを ガッカ、ウ
 セツケン と發音するは、其の母音を省きて、父音をのみ
 發音するものなり。前者は之を撥音ともいひ、後者は
 促音ともいふ。促音の假名は ツ を假り用ふ。平
 假名 つ なり。

七、轉音

○カハ アフグ かどを カワ アナグ(アオグ) かど
 發音するとあり。之を轉音といふ。
 漢字を續けて發音する場合も字音と發音と一致せ
 ぬとあり。

白菊 山田 夫婦 格子 觀音 河内 金具
 進歩

第二章 假名遣

○ヤマ 井ド サクラ かど、語の綴方を假名遣といふ。
 ヤマ サクラ かどは、假名と發音と一致する故、誤を
 生ずるをなけれども、井ド かどは、或は イド と
 誤るとあり。こゝには漢字音以外に就きて是等の誤
 を避くべき法をのぶ。

誤り易き假名

ハ	ハ	ワ	ア	ヤ	泡栗
ヒ	井	イ			鯛藍權
フ	ウ	ユ			買用
ヘ	エ	エ			上飢笛
					ズ
					水數

ホ ヲ ナ オ ヨ 顔
一、ハ ロ ズ ド

○ハ は他音下ニ續きて發音せらるゝごまに限り、多く
ワ と發音せらる。カハ、イハ、などの如し。

他音の下ニ續きて、ワ と發音せらるごも、ワ と
かくべき語少くして、ハ とかくべき語却て多し。
故に、ワ とかくべき語の大略を擧げて、ハ、ワ、別
つ。

あわ泡沫 あわつ周章 かわく乾渴
くつわ響 くるわ廓 さわぐ騒噪
さわやか爽 さわぶ よわし弱
いわし鱈 たわむ撓 たわやめ手弱

○こごわり理 こごわる斷謝 こごわざ謔

いひわけ言譯 いわさ仕事

二、ヒ、井、イ

○ヒ は他音の下に續く時は、イ と發音せらるゝ故、
イ に紛る。
井 は孰しありても、イ と發音せらるゝ故、上ニ
在りては、イ に紛れ、中以下に在りては、ヒ にも
イ にも紛る。

上にて、井 とかくべき語

る豕猪亥 るのこ豕
るもり蝟 る蘭
るなな田舎 るる居

他音の下にありて 井 とかくへき語

ある藍 くれなる紅 あぢさる紫陽花

くらの位 もとる基 とりる鳥居

上かもの鴨居 ひさる率 まるる泰る

他音の下にありて、イ とかくべき語

かい權 れい(ユ)老 く(ユ)悔

むくい(ユ)報

右の外、最初にありて、イ と發音せらるゝものは多く、イ にして、他音の下にありて、イ と發音せらるゝものは、多く、ヒ なり。

三、 ヲ、ウ、エ

○フ は他音の下にある時は、ウ と發音せらる。ア

フ(逢) カフ(買) などの如し。されど漢字音の外、ウ

とかくべき語なければ、大概 フ と心得べし。

フ を ナ オ かと發音するにあり。されど、是等

は左の數語に過ぎず。

あふぐ仰扇 あふひ葵 たふる倒

又、フ は ユ と發音せらるゝにあり。モナフ用

タフ堪 などの如し。左に ユ とかくべき例を舉

ぐ。

おゆ(イ)老 くゆ(イ)悔 ひくゆ(イ)報

いゆ(エ)癒 れはゆ(エ)覺 きゆ(エ)消

きこゆ(エ)聞 こゆ(エ)越肥 さかゆ(エ)榮

そびゆ(エ)聳 たゆ(エ)絶斷 はゆ(エ)生

ひゆ(エ)冷

ふゆ(エ)殖

はゆ(エ)吠吼

みゆ(エ)見

もゆ(エ)燃萌

又 フ ユ ウ が紛るゝとあり。ウ ごかくべき

語を示す。

うう(エ)植飢 すう(エ)据

四 へ エ エ

○へ は他音の下にある時は、エ と發音せらる。イ

へ ウへ などのごとし。

エ はいづくりにありても、エ と發音せらる。エバ

ツエ などの如し。

上にて エ ごかくべき語

る餌 るぐし醜

るふ醉

るむ笑

るくほ醜

る繪漢字音

るんぶゆ槐

他音の下にありて、エ とかくべき語、

こる聲

する末

つる杖

つくる机

ゆる故

ちる智慧漢字音

うる(ウ)植飢 する(ウ)据

他音の下にありて、エ とかくべき語、

ひえ神

ふえ笛

さゞえ蝶螺

いえ(ユ)

おほえ(ユ)

きえ(ユ)

きこえ(ユ)

こえ(ユ)

さかえ(ユ)

そびえ(ユ)

たえ(ユ)

はえ(ユ)

ひえ(ユ)

ふえ(ユ)

ほえ(ユ)

みえ(ユ)

もえ(ユ)

五、ホ ナ オ

○ホ は他音の下にある時は、ナ オ など發音せらる。カホ シホ などの如し。

ナ はいづくりに在りても オ ご發音せらるゝとあり、ナカ(岡) トナ(十) などの如し。

上よりありて、ナ ごかくべき語。

を小男緒芋尾岑 をち伯叔父(小父) をば伯叔母(小母)

をこめ小女 をんな女 をみなべし女郎花

をつご夫 をひ甥 をけ桶

をか岡 をさ長箴 をさなし幼稚

をぎ萩 をとる踊 をし鴛鴦

をし惜 をこ痴 をかし可笑

をし癩 をち遠 をこつひ一昨日

をし節檻居 をる折 をがむ拜

をし斧 をかす犯 をさむ治修納收

をしふ敬 をはる終

他音の下よりありて、ナ とかくべき語。

あを青 いさを功 うを魚

かをる薫 さを棹 こを十

みさを操

他音の下よりありて オ ごかくべき語なし

六、フ ウ ホ オ

○右に述べたるは、轉音上の誤るべきものなるが、此等の

外引音の發音せらるゝ場合にも、誤を生ずるゝあり。
即 オ、ホシ ユ、ウヂ ユ、フベ などの如し。

ホ とかくべき語、

れ、ほし多

れ、ほき大

お、ほやけ公

お、ほせ命仰

れ、ほす生育

お、ほかみ狼

こ、ほり氷

こ、ほる通

こ、ほし遠

ほ、ほづき酸漿

こ、ほろぎ蟋蟀

あか、ほ赤穂

ウ とかくべき語、

い、もうご(イモ・ピト)

か、うぶり(カカブリ)被冠

は、うき(ハハキ)

か、うち(カハチ)

あき、うど(アキピト)

つか、うまつる(ツカヘマツル)

おも、うて(オモヒテ)

か、うがい(カミカキ)

か、うべ(カミベ)

こ、うぢ(コミチ)

ま、うす(マナス)

ま、うづ(マ井ヅ)

は、やう(ハヤク)

ひ、うが(ヒムカ)

ふ、うふ(フフ)

や、うか(ヤカ)

フ とかくべき語、

あ、ふぎ扇

あ、ふみ近江

きの、ふ昨日

け、ふ今日

ゆ、ふベタ

ふ、くろ、ふ梟

あ、ふ逢

い、ふ云

お、ふ追魚

か、ふ買

く、ふ食

こ、ふ乞請

た、ぶさ、ふ携

す、ふ吸

そ、ふ添副

つた、ふ傳

ご、ふ問

お、こな、ふ行

ぬ、ふ縫

ご、ごの、ふ調

いは、ふ祝

には、ふ句
 ま、ふ舞ふ
 ゆ、ふ結
 おも、ふ思
 かよ、ふ通
 わら、ふ笑
 ふる、ふ飾
 ひろ、ふ拾
 ゑ、ふ醉
 ア、フ(逢)より以下は皆、二音に ア、ウ の如く發音せらるゝによりて フ なるを明なり。

七、ア列 オ列

○ウ フ の添はりて引音に發音せらるゝ場合には上の音のア列、オ列を區別するを難し。即 ア、フ オ、フ カ、ウベ コ、ウヂ 等の如し。
 ウ の場合に於てハ語原を察し、カウベ は カ[○]ミベ の訛なれば カ なり、コウヂ は コ[○]ミナ の訛なれば コ なり、と推知すべし。

フ の場合に於ては、二音に發音し、ア、フ は ア、フ なれば ア なり、オ、フ は オ、フ なれば オ なり、と心得、或は タヅサ、フ は タヅサヘ、さもなり、ト、ノ、フ ト、ノ、ヘ、さもなれど、タヅソヘ ト、ナヘ、こはならざるによりて推し量るべし。

第三章 漢字

一 畫及部首

○漢字を組織せる其の一筆を畫と云ふ。例へば 人 は ノ、こ、し、この二畫より成り、弓 は 一、こ、この三畫より成れるが如し。此の

畫の種類すべての漢字にわたりて凡三十餘もあるべし。

左の漢字は幾畫より成れるか。

門 幼 乃 巡 母 凸
述 盲 卯 猛

○漢字は字形にて分類す。例へば 梅 松 など字の左に 木 あるを木偏、語 論 などは言偏、仁 信 などは人偏といふ。又 利 削 など字の右に リ あるを立刀、鴨 鴉 などを鳥の旁といひ、宇 家 など字の上に 宀 あるをウ冠、笠 箒 などを竹冠といふ。此の外 雁 歷 などを厂の部とし、疾 病 などを疒の部とし、然 烈 など

灬の部とす。此等の部すべて二百十四あり。之を部首といひ、すべての漢字を分類す。

左に部首の特別の名ある者を擧ぐ。

イ(行人偏)	マ(三水)	ミ(三水)	广(麻垂)
ハ(冠)	ナ(草冠草合)	リ(立心偏)	欠(アクビ)
月(肉月)	示(示偏)	衣(衣偏)	禾(ノギ偏)
門(門構)	之(之繞)	頁(大貝)	隹(古鳥)
小(小邑)	大(大邑)		

二、字體

○漢字に種々の體あり。通常用ふるは楷書(眞行書、草書の三なり)。

楷書 源 義 經

行書 源 義 徑
草書 源 義 徑

此の外に篆書、隸書などいふもあれど、一般に用ふるものにあらず。

○同じ楷書にして字形の異なる者あり。古文(古字)又は畧筆にして俗に概して畧字といふ。

李 学 昏 尽 乱 独 称 对 难 断
吳 变 仏 斉 沢

三 音訓

○漢字の音は支那の語にして、之を漢字音とも字音とも音とも云ふ。此の音は我が國に傳りて多少原音を變じて一種の日本音となり、支那に於いても頗その古

音を變じたる故に、今の支那音こゝ全く別種の如くなりたる者なり。

○漢字は一字皆一音なり。支、微、歌、麻、虞、魚、

壽、茶、菓の如きは固より一音に聞ゆれども、又

東、京、則など二音の如くに聞ゆる者あり。其の

ウ、イ、クの如きを韻の假字と云ふ。韻の假字は、

イ、井「ウ」又、ム「フ」ツ、ク、チ、キ「の十種に限る。齊、階、税、

害「水、瑞、追、類」刀、相、秋、用、長、教、要、

文、桓、寒、山、侵、覃、鹽、咸「甲、蝶、十、

納「拙、末、活」渥、菊、職「七、埒、八」益、席、

敵「の如し。

此の内、ヌ、ムの音は古よりンに變じて通例を

の別を立てず。

明治三十三年八月文部省は小學校にて用ふる字音假名をば現今の發音のまゝに寫すこととし、
ウ、フの韻を廢し、
一を定むる等種々の改定をしたり。されどここには一千年間用ひ來れる假字の法を説けり。下章の字音假名遣も亦然り。

○一字にて兩様の音を有する者あり。一を漢音と云ひ、一を吳音といふ。是字音を傳へたる地方と時代との異なるに因る。左に少しく漢吳音の差の著しき者を示さむ。

大	木	内	人	皇	九	益	行	明	仰	直	月	唯	權
タイ	ボク	ダイ	ジン	クワウ	キウ	エキ	カウ	メイ	ギヤウ	チヨク	ゲツ	井	ケン
ダイ	モク	ナイ	ニン	ワウ	ク	ヤク	ギヤウ	ミヤウ	カウ	ヂキ	グワツ	ユ井	ゴン
漢音							漢音						
							吳音						

漢音を用ふるに吳音を用ふるは習慣にて別れたり。次の語共に就いて知るべし。

乾坤	乾物	荷物	僭越	越訴	鐘樓
半鐘	乞食	飲食	春夏	夏至	依頼

○漢吳音の外に又唐音と云ふ者あり。是は極めて稀なり。

歸依	戰役	役人	海陸	北陸道
金銀	黄金	外國	外道	米穀
西洋	東西	人形	形体	大名
				新米
				名實

行宮 南京 看經 普請 杏子

○漢字を國語に譯して讀むを訓。又はヨミ、云ふ。天地、人、神、内、外、教、習、聊、蓋、噫等の如し。されど總べての漢字は悉訓あるにあらず。又一字に二以上の訓ある者あり。外はソト、ホカ、ハツス、ハヅル、など訓むべく、生はキ、ナマ、ウマル、ウム、イク、イカス、オフ、ハユ、など訓むべきが如し。

○訓ありて音なき字あり。是は我が國にて造れる者にて和字と云ふ。榊、辻、峠、鰯、鷹、鳥等の類なり。我が國に行はるゝ字音の數は今日の發音に従へは三百五十許。從來の假字遣によれば四百三十餘。其の外轉音にて二十五許あり。

第四章 字音假名遣

○漢字音を表すに假名をつくるを字音假字遣といふ。是亦、其の發音と假字遣と一致せざるより誤る。例へば繪はエなるをエと誤り、孝はカウなるをコオなどと誤るが如し。今、其の大畧を示す。

一、轉音或は畧音上の誤

○イと發音するものゝ中、

ゐ 爲 位 違 威 遣 唯 尉 胃 畏 委

○エと發音するものゝ中、

ゑ 院 員 尹 域 水 追 類 穢 遠 怨 援 垣

○オと發音するものゝ中、

を 惡 汚 温 穩 園

○ヂ或はジと發音するものゝ中

ぢ 持 尼 陣 塵 軸 竺 昵

○ヅ或はズと發音するものゝ中、

ず 隨 瑞 藥 豆

○右の外、拗音を直音に發音するとあり。例へば 火

をカ、會 確 を カク、觀 を カン

活を カツ 術 を シツ など誤るとあり、

二、引音上の誤

○オ、ウと發音するものゝ中、

あふ 押 凹

れう 應 歐

わう 王 往

あう

○ユ、ウと發音するものゝ中

こふ 劫 業、

かふ 甲 合
 こう 口 后 工 公 侯 後 溝 孔 厚 寇
 洪 弘 興 恒 堯
 くろう 光 皇 黄 荒 轟
 かう
 ○ソウウ ご發音するものゝ中、
 さふ 挿 雜
 そう 曾 宗 總 送 走 奏 叢
 さう
 ○トウウ ご發音するものゝ中、
 たふ 答 納
 とう 東 同 豆 童 動 冬 統 等 藤

たう
 ○ノウウ ご發音するものゝ中、
 なる 納
 のう 農 能
 なる
 ○ホウウ ご發音するものゝ中、
 はふ 法
 はふ 法
 ほう 峰 豐 封 剖 朋 矛 眸
 ほう
 ○モウウ ご發音するものゝ中、
 もう 蒙

まう

○ヨ、ウ　ご發音するものゝ中

えふ　葉

えう　夭　幼　逢　要　曜

よう　用　容　擁

やう

○ロ、ウ　ご發音するものゝ中、

らふ　蠟

ろう　樓　隴　弄　陋　漏

○イ、ウ　ご發音するものゝ中、

いふ　邑

いう



○キ、ウ　ご發音するものゝ中、

きふ　及　急　給　泣

きう

○シ、ウ　ご發音するものゝ中、

そふ　習　執　集　楫　澁　拾　十

さう

○チ、ウ　ご發音するものゝ中、

ちふ　螫

ちう

○ニ、ウ　ご發音するものゝ中、

にふ　入

にう

○リ、ウ、ご發音するものゝ中、

りふ 立

○ニ、リ、ウ、ご發音するものゝ中、

○キ、ウ、ご發音するものゝ中、

けふ 協 夾 業

○ハ、ケ、ウ、ご發音するものゝ中、

きけう 喬 教 梟 堯 中

○カ、キ、ウ、ご發音するものゝ中、

ききう 共 恐 凶 興 競 凝

○シ、ウ、ご發音するものゝ中、

せふ 妾 捷 涉

○セ、ウ、ご發音するものゝ中、

せう 小 召 萑 燒 蕭 椒

○ショ、ウ、ご發音するものゝ中、

じょう 松 鍾 誦 稱 中 升 證 承 勝 乘 繩

○チ、ウ、ご發音するものゝ中、

てふ 蝶 帖 疊

○テ、ウ、ご發音するものゝ中、

てう 朝 兆 調 烏 鈞 弔 條

○チ、ウ、ご發音するものゝ中、

ちよう 重 冢 徵 寵

○ヒ、ウ、ご發音するものゝ中、

へう 豹 表 票 廟

○ヒ、ウ、ご發音するものゝ中、

ひよう 氷 馮

○ミ、ウ、ご發音するものゝ中、

めう 苗 妙

みう
リウと發音するものの中、

れふ 獵

れう 僚 聊 寥 了 料

りょう 龍 陵

りうと發音するものの中

○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中
○さしやうと發音するものの中

言語篇

○文章を組織する主要なる言語に七種あり。之を品詞
といふ。七品詞の外に品詞を補助する語あり。之を
助辭といふ。

あはれ 慕はら。彼は賢くして、且よく勉
むる 人なり。

右の あはれ 慕はら 彼 賢く 且 よく 勉む
る 人 などは品詞にして、は して なり 等は

助辭なり。

右の品詞につき、之を區別すれば

あはれ………は事物に感動する時發する語なり、

彼……………は名の代に用ふる語なり。
 慕はし、賢く……………は事物の性質、状態等を表す語なり、
 且……………はことばを續くる語なり。
 よく……………は動詞、形容詞等に副ふ語なり。
 勉むる……………は事物の動作を表す語なり。
 人……………は事物の名を表す語なり。
 ○吾々は此等の品詞と品詞を補助する助辭を以て種々なる思想を表すを得。

第一章 名詞

- 山 鳥 机 正成 などは物の名なり。
- 戦争 運動 勉強 などは事柄の名なり。

かく事物の名を表す語を名詞といふ。
 ○普通名詞・特別名詞 山 運動 などの如く、他の同類の事物に通用せらるる名詞を普通名詞といひ、正成 日本 などの如く、他に通用せられぬ名詞を特別名詞といふ。人名、地名などは特別名詞なり。
 左の文につき、普通名詞と特別名詞とを挙げよ。

- 一、孝は 徳の本なり。
- 二、勉強は 幸福の母。
- 三、光陰は 矢の如し。
- 四、義経は 頼朝の弟にして 義朝の子なり。
- 五、清正は 熊本城と 共に 偏く 人に 知り。

られたり。

六、大日本は 亞細亞州の 東部に 位して
 北は 樺太に むかひ、 東南は 太平洋を
 のぞき、 西は 支那 朝鮮 及 滿州を
 海を隔てて 相對し、 地形 東北より
 斜に 西南に 連れり。

第二章 代名詞

太郎が 曰はく、これは わが 本なり。

右のわ といふ語は 太郎 といふ人の名の代に用
 ひられ、これ といふ語は 本 といふ物の名の代
 に用ひられたる語なり。かく名詞の代に用ひらるゝ

語を代名詞といふ。

○人代名詞 指示代名詞 わ 汝 などは人の名の代
 に用ひらるゝ語なれば、之を人代名詞といひ、これ
 そこ などは事物、場所等を指示するに用ひらるゝ語
 なれば、之を指示代名詞といふ。

○人代名詞の稱 わ 私 などは話す人が自身の名の
 代に用ふる故、自稱といふ。 汝 君 などは相手の名
 の代に用ふる故、對稱といふ。 彼 は話す人、又ハ對手
 以外の人の名の代に用ふる故、別稱、又は他稱といふ。
 誰は其の人の疑じき時、或は不定なる時に用ふる故、
 疑稱、又は不定稱といふ。

己	わ	わ	自
汝	れ	な	稱
	な	な	對
	れ		稱
あ	か	か	別
れ	れ		稱
	た	た	疑
	れ		稱

此等の外

○人自稱には 余 私 小生 拙者 などいひ
 對稱には 君 足下 御身 貴殿 など種々あり。
 此等の人代名詞は尊卑によりて、其の用方を異にする
 こと、談話の時のことくなれば、注意せざるべからず。
 ○別稱の かれ といふ代名詞は、人を卑めていふ時に
 用ひらるゝと多し。

彼のこき成功は いやむべし。

彼 何人ぞや。

普通に別稱として用ひらるゝ語は 氏 君 などに
 して尊敬する人に對しては 公 卿 先生 などを
 用ふ。

氏は 七歳にして 初めて 學に つきたり。

君が如きは 特志の 人ぞ いふべし。

余 未曾 忠臣 公の如き 者を 聞かず。

先生の 號を 松蔭と いふ。

○指示代名詞の稱 これ ことなどは自身の近くに
 ある事物、場所に用ふる故、近稱といひ、それ こそ
 などは對手の周圍に在る事物、場所に用ふる故、中稱

こいひ、あれ、あそこ、などは自身にも、對手にも遠ざかりたる事物、場所に用ふる故、遠稱こいひ、いづれ、いづこ、などは疑しく、又それご定まらぬ事物、場所、に用ふる故疑稱、又は不定稱こいふ。

こ	こ	こ	こ	こ	近
なた	ち	そ	れ	そ	稱中
そ	そ	そ	そ	そ	稱中
なた	ち	こ	れ		稱遠
かあ	あ	かあ	あか	あか	稱遠
な		しそ			稱疑
なた	ち	ここ	れれ		稱疑
いづ	いづ	いづ	いづ	ド	稱
かた	ち	こ	れ		稱
	方	場	事		
	向	所	物		

指示代名詞は轉じて人代名詞ともなる。前に挙げた

る、かれの如きは即其の一なり。

そこ(汝)に之を遣す。

いづれ(衆人)も喜びたり。

かれ(太郎)をば愛しこれ(次郎)をば憎む。

どなたも正直なる善き小供なり。

此等の外

疑稱には なに事物 いつ時 いくつ數 いくばく數量 などあり。

左の文につき、代名詞の種類、及、稱を挙げよ。

- 一、君が 尋ぬる 人は 吾なり。
- 二、かしこに 居る 人は 誰ぞ。
- 三、これを 誰か ころに 置きたる。

- 四、汝は いづくに 行くか。
- 五、彼は 蓋、英國人 なり。
- 六、我 何をか 取らむ。これを 取らむか。
それを 取らむか。
- 七、あなたは そこに 居る。
- 八、おのれは あちへ 向きたり。
- 九、小生も 参り候間、貴殿にも 御出下され
度候

第三章 形容詞

赤き 花は 美し。

右の 赤き 美し 花の 状態を表したる語なり。

かく事物の状態、或は性質等を表す語を形容詞といふ。

○語根・語尾 赤き などいふ語は場合によりて其の下部を變ず。

- 一、赤アカ く
- 二、赤アカ し
- 三、赤アカ き
- 四、赤アカ けれ

上部の あか のまじく變せぬ部分を 語根といひ、

下部の く し き けれ のまじく變ずる部分を

語尾といふ。

○活用 語尾の變化を活用といふ。五段に形造らる。第一段の第二段にも用ひらるゝこと左のまじ。



語根	語尾	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
高 <small>タカ</small>	實 <small>カシコ</small>	く	く	し	き	けれ

左の形容詞の語根、及語尾の活用を見よ。

深し、清し、長し、青し、尊し、樂し、美し、寂し、貧し、悪し、

右の 樂し より以下は語根の末に し といふ音をもてり。かく語根の末に し といふ音をもつ形容詞は第三段に於て し が重る故、其の一を省略す。

語根	語尾	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
樂 <small>タカラシ</small>		く	く	し	き	けれ

右の外、左の如き語も形容詞と見るべし。

夜 靜なり。これは 奇麗なり。

明なる 月 善良なる 人

春日 遅々たり。皎々たる 月

左の文中の形容詞を挙げよ。

- 一、 新年は 目出たし。
- 二、 遠き 慮あれば、近き 憂なり。
- 三、 水 清ければ、大魚 棲まず。
- 四、 牛の 歩は、遅けれども、休まずば 千里の遠き 處にも 達すべし。
- 五、 善き 人は 多く、悪しき 人は 少し。
- 六、 弱くとも 侮るべからず。強くとも 恐る

べからず。

七、 高き 處に 登るには 必 低き 處より

始む。

八、 愚なる 人も 勉め 學ばず、 賢き人こ

なるべし。

九、 廣漠たる 原野 日暮れて 寂寞たり。

十、 朝 またき 嵐の山の 寒ければ、 紅葉の

錦 きぬ 人ぞ なき。

第四章 動詞

人が ゆく。 鳥 遊ぶ。

右の ゆく 遊ぶ は人、及鳥の動作を表したる語な

り。 かく事物の動作を表す語を動詞といふ。

左の文中の動詞を挙げよ。

一、 雨 降り、 風 吹く。

二、 川を 渡り、 山を 越ゆ。

三、 よく 勉め、 また よく 遊ぶ。

四、 學びて 習ふこそ 樂しけれ。

五、 刀 折れ 矢 つきて 臣事 終る。

六、 老いて 後 悔ゆる ぞ なかれ。

七、 あはれ 世の 人々よ、 勤怠の 二字の

義を 辨ふべし。

○語根・語尾 動詞は場合によりて、其の下部を變ず。

一、 ゆ か

二、ゆ き
 三、ゆ く
 四、ゆ け
 のでこく、上部の變せぬ部分を語根といひ、か
 きく、け のでこく、下部の變ずる部分を語尾とい
 ふ。

○ゆく、こいふ動詞の如く、其の語尾を五十音圖の ア
 イ ウ エ の四列に變化する動詞を第一類と
 言ふ。

カ	行	咲	語根	語尾	ア	列	イ	列	ウ	列	エ	列
タ	行	立			カ	列	キ	列	ク	列	ケ	列
					タ	列	チ	列	ツ	列	テ	列

マ	行	讀			マ	列	ミ	列	ム	列	メ	列
---	---	---	--	--	---	---	---	---	---	---	---	---

○つく(盡) こいふ動詞は つき、つく、こい
 列の語尾をもてるのみにて、つか、つけ などこは
 いはず。かくの如き動詞を第二類と
 言ふ。

カ	行	起	語根	語尾	イ	列	ウ	列
タ	行	落			カ	列	キ	列
マ	行	試			タ	列	チ	列
					マ	列	ミ	列
					ム	列	メ	列

○うく(受) こいふ動詞は うけ、うく、こ
 列の語尾あれども、うか、うき、こはいはず。か
 る類を第三類と
 言ふ。

カ	行助	語根	尾	エ	列	ウ	列
タ	行捨			て		つ	
マ	行留			め		む	

○きる(着) こいふ動詞は き このみいひて、か

け こはいはず。この種の動詞を第四類とす。

カ	行着	き
マ	行見	み

○ける(蹴) こいふ動詞は け このみいひて、か

く こはいはず。此の種の動詞を第五類とす。

カ	行蹴	け
---	----	---

○右の外、特種の變化ある動詞を第六類とす。

カ	行來	こ	き	く
サ	行爲	せ	じ	す

左の動詞の種類を問ふ。

- 學ぶ 降る 晴る 恨む 報ゆ 用ふ 受く
- 飢う 馳す 當つ 寝ぬ 辨ふ 教ふ 止む
- 覺ゆ 干る 射る

○活用 右に述べたる各種の動詞には皆、五段の活用あり。

第一類(四段活) はウ列音が三段にも四段にも用ひらる。

	カ行	咲	か	第一段
	タ行	立	た	第二段
ア	列			第三段
イ	列	ち	き	第四段
ウ	列	つ	く	第五段
エ	列			
オ	列			

ア列音がず_レに續きエ列音がどもに續く動詞は皆第一類なり。咲く_レこいふ動詞は 咲かず 咲けども_レこ續くが如し。

左の動詞の活用を問ふ。

書く 話す 打つ 云ふ 住む 降る

○第二類(上二段活) はイ列音が一段及二段に、ウ列音が三段に、ウ列音にるを添へて四段に、れを添へて五段に

用ひらる。

	カ行	盡	き	第一段
	タ行	落	ち	第二段
イ	列			第三段
ウ	列	ち	き	第四段
エ	列	つ	く	第五段
オ	列			
カ	列	つ	く	
キ	列	る	る	
ク	列	つ	く	
ケ	列	れ	れ	

イ列音にず_レが續き、ウ列音にれ_レが添はりたるにどもが續く動詞は第二類なり。盡く_レこいふ動詞は 盡き_レす 盡くれども_レこ續く故、第二類なることを知る。

左の動詞の活用を問ふ。

起く 閉づ 用ふ 試む 老ゆ 懲る 強ふ
率う

○第三類(下二段活) は第二段より以下は第二類に同じ。

	カ行	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
	受					
	ケ					
エ	テ					
	タ行					
	捨					
	テ					
ウ	ツ					
	ク					
	ケ					
	ク					
	ル					
	ル					
	レ					
	レ					

エ列音にずが續き、ウ列音にれが添りてともに續く動詞は第三類なり。

- 助く 馳す 當つ 兼ぬ 加ふ 眺む 越ゆ
- 晴る 植う 得

○第四類(上一段活) はイ列音が一段、二段に、それになるを

添へたるが三段、四段にれを添へたるが五段に用ひらる。

	カ行	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
	着					
	キ					
イ	ニ					
	ナ行					
	煮					
	ニ					
	キ					
	ル					
	ル					
	レ					
	レ					

イ列音にるれが添はる動詞は第四類なり。

左の動詞の活用を問ふ。

- 似る 干る 見る 射る 居る

○第五類(下一段活) はエ列音が一段、二段に、それになるを添へたるが三段、四段に、れを添へたるが五段に用ひらる。



カ行 蹴	第一	第一	第一	第一	第一
	段	段	段	段	段
	蹴	け	け	け	け
	エ	け	る	け	る
	列	け	る	け	れ

第五類の動詞は文語にてはけるの一語のみなり。
 第四類、第五類の動詞には語根こいふべきものなし。
 但、口語には第二、三類の動詞を第四、五類に活用せざるもの多し。

カ行 起	タ行 落	第一	第一	第一	第一	第一	
		段	段	段	段	段	
		起	け	け	け	け	け
		受	け	る	け	る	け
		タ	ち	る	ち	る	ち

マ行 恨	止	第一	第一	第一	第一	第一	
		段	段	段	段	段	
		恨	め	め	め	め	め
		マ	め	る	め	る	め
		行	め	る	め	る	め

故に第四類の語尾を有する動詞にして語根あるものは口語にして、文語にあらざることを知るべし。

○第六類(變格) はその活用の形に四種あり、總べて變格こいふ。カ、サ、ナ、ラ の四行にあり。

カ行 來	サ行 爲	ナ行 死	ラ行 在	第一	第一	第一	第一	第一	
				段	段	段	段	段	
				來	せ	な	在	こ	き
				カ	せ	ぬ	り	く	る
				行	れ	れ	れ	る	る

カ行變格は上二段活の第一段がオ列音なるもの。サ行變格は下二段活の第二段がイ列音なるもの。ナ行變格は四段活のウ列音に^レの添りて第四段第五段となり、^レの音は五段以外に特に命令の意となるもの。ラ行變格は四段活の第三段がイ列音なるものなり。

第六類に屬する動詞は右の外、左の數語に過ぎず。

れはす 往ぬ 有り 居り 侍り 然り
或る名詞にサ行變格が添はる時は動詞となる。

死す 賞す 變す 察す 勉強す

左の動詞の語根と語尾の活用を問ふ、

- 一、天を 恨みず、人を さがめず。
- 二、心 こゝに 在らざれば 見れども 見え

行 路 報 左
 か じ り ぬ
 キ ン ク ケ
 中 中 中
 中 中 中
 中 中 中
 中 中 中

ず、聞けども 聞えず。

三、人に 頼りて 事を 成さむこ 思ふ も

四、あはれ 世の 人よ、 勤勉の 二字を 辨

へて、 老いて 後に 悔ゆる 事 なかれ。

五、身 を 立て 道 を 行ひ 名 を 後世に

揚げて 父 母 を 顯すは 孝の 終なり。

六、家 の まはりには 種々の 樹木を 植ゑ

たるぞ いこ 奥ゆかしき。

七、君 の 爲 世 の ため 何か 惜しからむ

捨てし かひ ある 命なりせば。

八、古き 都を きて 見れば 淺茅原こそ

荒れにける。月の光は限なく秋
 風のみぞ身にはさむ。
 九、刀折れ矢のつきて臣が事畢る、
 十、七たび人間に生れてこの賊を滅
 さむ。
 十一、力山を抜き氣世を蓋ふ。
 十二、奉持して日々餘香を拜す。
 ○自動・他動・動詞に二種の性あり。
 舟が沈む。
 右の沈むといふ舟の動作は他物に及ばず。されど
 海賊が舟を沈む。
 といへばこの沈むといふ動作は海賊の動作に

て、舟を處分するなり。
 枝が折る
 右の折るといふ枝の動作は他物に及ばず。され
 と
 人が枝を折る。
 といへば折るといふ動作は人の動作にして、枝を
 處分するなり。
 かく物が物を處分する動作を 他動といひ、然らざる
 を自動といふ。
 ○語根——語尾の活用——自他——の例

沈	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	自他
ま						
み						
む						
む						
め						
自						

移 <small>ウツ</small>	殺 <small>コロ</small>	死 <small>シ</small>	折 <small>ヲ</small>			
さ	ら	さ	な	ら	れ	め
じ	り	じ	に	り	れ	め
す	る	す	ぬ	る	る	む
す	る	す	ぬ	る	る	む
せ	れ	せ	ぬ	れ	る	む
他	自	他	自	他	自	他

左の動詞の語尾の活用、自他を問ふ。

解ト 受ウケ 暮ク 暮ク 衰オトロ 碎クズ 堪タ 絶タ 恨ウラミ 支サ 添ソフ
 起オキ 肥コ 燃モ 植ウ 老オ 携オモ 止ト 増マ 笑ワ 用モ
 終オハ 教カ 了マ 榮サ 開ヒ 吹フ 進シ 退ヒ 向ム 亡ナ 入イ
 倒タ

左の動詞に誤あらは正せ。

- 一、こゝに 塵介を 捨てる 事を 禁ず。
- 二、猿も 木から 落ちるこゝ あり。
- 三、人に 物を 與へる こゝは 樂し。
- 四、早く 起きる 人は 却て 遅く 寝ねる なり。
- 五、彼は 凍へて 死にたるに あらず、 飢へて 死にたるなり。
- 六、身体 衰へる 時は 元氣も 亡びるに 至るべし。
- 七、一家 舉りて 勉める 時は 其の家の 榮へる こゝ 疑 なし。

- 八、よく 困難に 堪へる 人に あらずば、
大業を 仕遂ける こと 能はず。
- 九、人に 教ぬるは また 己の 爲なり。
- 十、不正の 物は 求める 事 勿れ。
- 十一、見へる 事 あり、聞える 事 なし。
- 十二、卑しき 言語は 用ゆる 事 勿れ。
- 十二、課業を 終つて 運動せよ。
- 十三、五に 三を 加はれば、八に なる。
- 十四、よく 散づる 人 また よく 集める 人も あり。
- 十五、學校に 出でる 者は 時間に 遅れる 事なき 様 注意すべし。

- 十六、夜も はや 更けたるにや 人聲も 絶へたり。
- 十七、開ける とは 遅くして 閉ぢる 事は いそ 早し。
- 十八、庭園には 樹木を 植へることを よけれ。
- 十九、天を 尤める と 勿れ、また 人を 恨みる と 勿れ。
- 廿、目を 受ければ 必 報ひる 事を 忘れる 事 勿れ。
- 廿一、財貨は 盡きる と あれど 芳名は 朽ちる と なし。
- 廿三、指 折り 數えて 御待ち申居り候えと

も 今に 御歸國 これなきは 如何なる
御都合に候や。

廿四、吾、敢て 老ひたるに あらず。
廿五、悔いる 事 なき 様 注意すべし。

第五章 副詞

いこ 高し。 甚 美し。

右の いこ 甚 といふ語は形容詞の意味を定めたる語にして、是等を副詞といふ。

必 行く。 屢 見ゆ。

右の 必 屢 といふ語は動詞の意義を定め限りたる語にして、是等もまた副詞なり。

早く 行く。 明に 見ゆ。

右の 早く 明に といふ語は元來形容詞なれども、動詞の意義を定め限る時は副詞となるなり。かく形容詞が副詞となりたる時はまた副詞を備ふるこゝあり。

いこ 早く 行く、 甚 明に 見ゆ。

故に動詞、形容詞、及他の副詞の意義を定め限る語を副詞といふ。

副詞の例

- 一、 必 行く。
- 二、 盖 少し。
- 三、 最 美し。
- 四、 頗 盛なり。
- 五、 尙 進む。
- 六、 殆 危し。

- 七、**稍** 解れり。
- 八、**熟** 考へたり。
- 九、**嘗** 君には 屢 逢ひけり。
- 十、**君** 待て とはら。
- 十一、**恭** しく 新年を 賀す。
- 十二、**春** は **既** に 去り、**秋** 未 來す。
- 十三、**常** に 流る。
- 十四、**今** こむ。
- 十五、**絶** んて 人なり。
- 十六、**牛** は **遅** く 歩む。
- 十七、**馬** は **速** に 馳す。
- 十八、**雁** は **春** 北地に 去り、**秋** 北地より くる。

- 十九、**朝** 早く 起き、**夜** は **遅** く 寝ぬ。
- 廿、**余** は **熱** 心に 君が いふ 事を 聴けり。

第六章 接續詞

筆 及 紙を もてり。

右の 及 は語を續けたる語なり。

花も 咲き 又 鳥も 鳴きたり。

右の 又 は句を續けたる語なり

甲は よく 勉強す。されど 乙は 常に 遊

び暮せり。

右の されど は文を續けたるなり。かく語、句、文章を續くる語を接續詞といふ。

接續詞の例

- 一、柿は美しく且甘じ。
- 二、山に登り、或は川に浮ぶ。
- 三、之を求めたるか。抑之を與へたるか。
- 四、才の及ばざるか。勉の足らざるか。
- 五、よく勉強したり。併落第せり。
- 六、余も行かむ。但雨降らば行かじ。
- 七、彼は俊傑なり。即千萬人に勝れたり。

第七章 感動詞

- あはれ 歲月 人を待たず。
- あゝ 盛なる哉。

あな 嬉しや。

右の あはれ あゝ あな などのごとく物に感動したる時に發する語を感動詞といふ。哉 や など感動を表す辭なれと是等は助辭の中にさくべし。

左の文中の感動詞を擧げよ

- 一、いざ 諸共に 散歩せむ。
- 二、いで 物 見せむ 小悴どもに。
- 三、あら 不思議や 海潮 忽に 退きたり。
- 四、やよ 待ち給へ 太郎殿。
- 五、あはや 火は 己に 屋根に 及べるぞや。
- 六、すは 盗人をさんなれ。
- 七、おれ 怖し。

第八章 助辭

花が 咲きたり。余は 日本人なり。

右の が たり は なり は名詞、動詞等に附屬して、之を補助する語なれば助辭といふ。

○活く助辭 活かぬ助辭 は が の如き助辭は變化なけれども、たり なり の如き助辭は たる なる の如く活用あり。かくのまゝく活用ある助辭を助動辭(助動詞)ともいひ、變化なきを助辭、又はテニナハともいふ。

○活く助辭 及其の活用

第一、動詞の第一段に附屬するもの

讀まる	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
受けらる	れ	れ	る	る	る
讀ます	せ	せ	す	す	す
受けさす	さ	せ	さ	さ	さ
讀まゑむ	め	め	む	む	む
讀ます	ず	ず	ず	ぬ	ぬ
讀まむ			む	む	め

第二、動詞の第二段に附屬するもの

讀みつ	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
讀みぬ	て	て	つ	つ	つ
	な	に	ぬ	ぬ	ぬ
			る	る	る
			ぬ	ぬ	ぬ
			れ	れ	れ

第三、動動の第三段に附屬するもの

讀み・たり	た	ら	た	り	た	り	た	る	た	れ
讀み・けり					け	り	け	る	け	れ
讀み・き					き		き		き	か
讀み・けむ					け	む	け	む	け	め
讀み・たし	た	く	た	く	た	し	た	き	た	けれ

第四、動詞第一類四段活の第五段、及第六類サ行變格の

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
讀む・べし	べ	く	べ	く	べし
讀む・まじ	ま	じ	く	ま	じ
讀む・らむ	ら	む	ら	む	らむ

第一段に附屬するもの

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
讀め・り	ら	り	り	る	れ
愛せ・り					

第五、名詞、代名詞に添はるもの

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
人たり	た	ら	り	た	る
池なり	な	ら	り	な	る

第六、動詞、形容詞の第四段、及助辭がのによりて名詞代名詞に添はるもの

受くる。

私のが

如し

でこく

でこく

でこと

でこき

—

○活かぬ助辭

第一、名詞、代名詞に添ふもの

が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと
が	の	を	に	へ	より	まで	ごと

第二、種々の語に添ふもの

花

が の を に へ より まで ごと

斯く

は も ぞ なん こそ や か さへ のみ はかり

第三、動詞、形容詞助動詞に添ふもの

咲かば

咲くとも

咲けども

咲きて

咲きつゝ

咲かぞ

此等の外、品詞に附屬する語は皆、助辭なりと知るべし。
左の文につき品詞の種類、及助辭の種類を舉げよ

王土にははらまれて、忠を致し、命を捨つる
は 人臣の道なり。必之を身の功名と
思ふべきに ならず。然れども 後の人を勵
し、その跡を あはれみて 賞せらるゝは 君の
御政なり。下さして 争ひ申すべきには あら

ぬにや。まましてさせる 功なくして、過分の

望を致す 事 自危おそむる ははなれど、前車

の轍うを見る 事は、誠に 有り難き ならひ

なりけむかし。中古までも 人のさのみ 豪強

なるをば 戒められき。豪強に 成りぬれば、必

驕る 心 あり。果して 身を 亡なし 家を

失ふ ためし あれば 戒めらるゝも 理なりけ

り。

言語は 君子の 樞機なりと いへり。あからさ

まにも 君を ないがゑろに ち、人に ねおせる

事は 言あるべからぬ 事にこそ。さきに 記しゝ

てごく、堅き 氷は 霜を 踏ふむより 至る な



普通文法教科書上卷終

らひなれば、亂臣賊子といふ者は、その始
心、言葉を慎まざるより出でくるなり。...

明治三十四年二月二十五日印刷
明治三十五年四月廿五日發行
明治三十四年五月廿五日發行
明治三十五年四月廿五日發行
明治三十四年五月廿五日發行
明治三十五年四月廿五日發行

定價		
上卷	貳拾貳錢	
中卷	貳拾五錢	
下卷	貳拾貳錢	

發行所

東京市神田區錦町一丁目
(特電話本局二四三八番)

明治書院

關西大賣捌

吉岡平助

明治三十四年九月廿五日
中學校用文部省檢定



著者 三矢重松
著者 清水平一郎
發行者 三樹平
印刷者 新井豐造
印刷所 明治印刷所

東京市神田區錦町一丁目十番地
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

